昭和28年２月20日第三種郵便物認可　毎月１回１日発行
令和３年８月25日印刷　令和３年９月１日発行　第69巻第９号　通巻第819号

不二

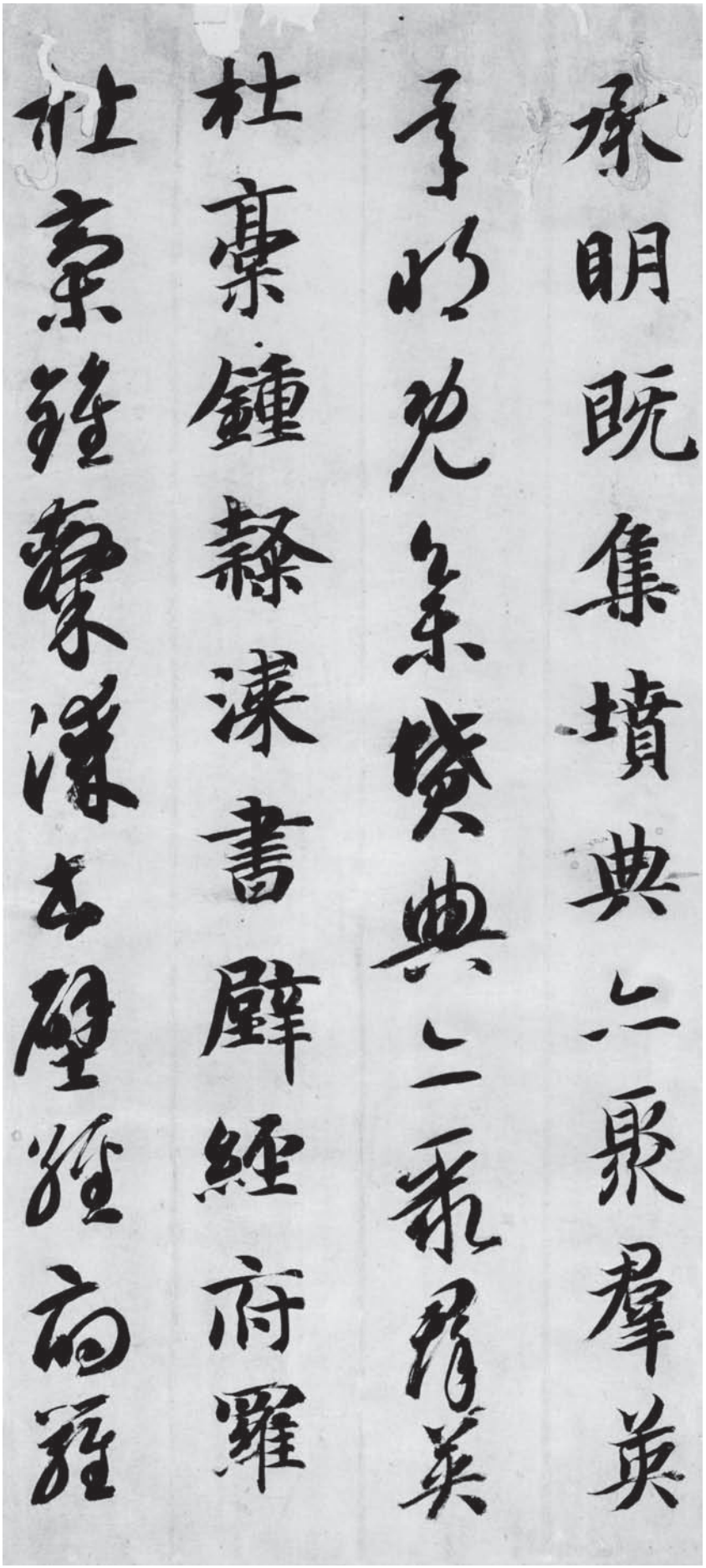
一　般　版

9/2021

令和三年度第2回昇格・昇段試験課題発表

公益財団法人 日本書道教育学会

真草千字文



（左達）承明　**既集墳典　亦聚羣英**　杜稾鍾隸　漆書壁經　府羅

（左は）承明（しょうめい）に（達す。）既（すで）に墳典（ふんてん）を集め、亦（ま）た群英を聚（あつ）む。杜稾鍾隷（とこうしょうれい）、漆書壁經（しつしょへきけい）あり。府には（将相（しょうしょう））羅（つら）なり、

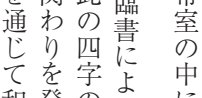
漢字半紙　専門部（五段～準初段＝昇段課題）『真草千字文』より「既集墳典」の四字の臨書

石橋鯉城臨

『真草千字文』　18ページ参照

智永（隋代・生没年未詳）

既集墳典（キシュウフンテン）



既ハ已ナリ事ヲ竣ルノ辭ナリ集ハ聚ナリ墳ハ大防ナリ即チ堤防ノ義ニシテ蓄積ノ意ナリ三皇ノ書ヲ指シテ墳ト謂フ所謂ル三墳ナリ典ハ法ナリ經ナリ五帝ノ書ヲ指シテ典ト謂フ所謂ル五典ナリ是レ王者ノ文庫盛大ニシテ古今ノ圖書ニ富ミ三墳五典ノ寶經ニ至ルマテ悉ク蒐集蓄積シテ遺缺アルコトナク文學ノ甚タ旺盛ナルヲ謂フナリ

※三墳＝三皇（伏犧（フクギ）、神農（シンノウ）、黄帝（コウテイ））時代の書物

※五典＝五帝（少昊（ショウコウ）、顓頊（センギョク）、高辛（コウシン）、唐堯（トウギョウ）、虞舜（グシュン））時代の書物

〈大　意〉

帝室の中に墳典を集める。

―臨書により、書の鑑賞眼を養う―

此の四字の草書を観察して平仮名との関わりを発見する。古典臨書の娯しみを通じて和様の書の真髄に触れたい。

【用具・用材】

筆＝精品蘭蕊羊毫
墨＝顕微無間
紙＝松雪

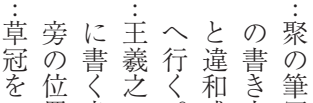
（習い方は25ページ）

漢字半紙（1級＝昇段課題、2級～5級＝月例課題）『真草千字文』より「亦聚羣英」の四字の臨書

石橋鯉城臨

『真草千字文』 18ページ参照

亦聚羣英（エキシュウグンエイ）



亦ハ又ナリ聚ハ會ナリ群ハ衆ナリ英ハ才徳衆ニ超ユル者ヲ謂フ是レ王者圖書ニ富ミ三墳五典ニ至ルマデ蓄積シテ遺缺ナク又英才賢徳ノ君子ヲ登庸シテ朝府ニ網羅シ賢才林ノ如ク文物典章發輝シテ王者ノ盛徳疆リ無キヲ謂フナリ

〈大　意〉

帝室には群英と称される優れた学者たちを集めて経書の原理を討議させた。

〈習い方〉

亦…亦の筆写体にして写経ではこの形で書かれる。音はエキ。

聚…聚の筆写体では、取の「又」の処の書き方に違いがある。馴れないと違和感もあろうがここから草書へ行く。

羣…王義之の蘭亭叙に見る「羊」を下に書く書き方。筆写体ではよく偏旁の位置を変えて書く。

英…草冠を「艹（ソイチ）」の形で書いている。

【用具・用材】

筆＝特選永昌
墨＝顕微無間
紙＝松雪

（習い方は25ページ）

漢字半紙（6級〜10級＝月例課題）

「千変万化」の四字を書きなさい。「千変」の二字だけを書いての提出も可。

石橋鯉城書

千変万化（せんぺんばんか）

いろいろさまざまに変化すること。

〈解　説〉

今迄基本の筆使いと運筆を学んできたが、文字を書きながらも体勢を崩さずに、身体で字を書くことを心掛けたい。

筆字では鋒先の弾力を利用して、墨もちよく書く必要があるので、筆使いの要領をつかむことが肝腎だ。

今月は、身体で書くこと及び「起筆」や「送筆」、そして「収筆」にメリハリをつけて書こうと「千変万化」の四字とした。坐法を決めて腕を上げての運筆で、この課題を仕上げて貰いたい。

〈書き方〉

千…概形は菱形に。縦の垂露の書き方は、懸針のように針をブラ下げたようなたよりないものではいけない。

変…本字は變で、本字の場合、真中の「言」を先に書く筆順である。戀も同様。

万…本字は萬だが、略字の「万」は古くから使われている。筆順は図解に示す通り、変体仮名の「万」などは筆順を違えたら書けたものではない。

化…人偏に「匕」、片仮名の場合は「ヒ」となり「匕」ではない。

【用具・用材】

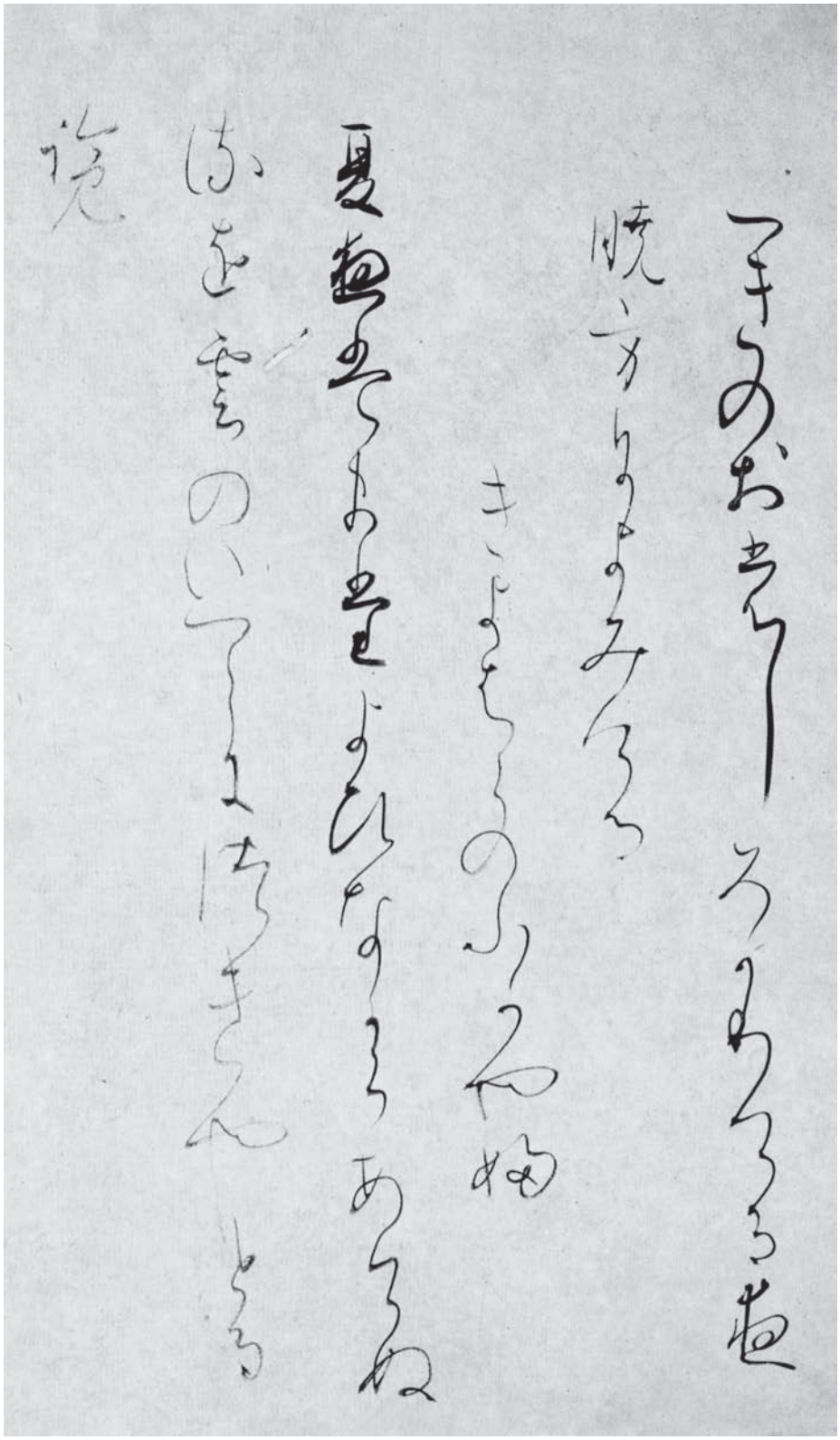
筆＝書学院廻腕筆五号
墨＝天衣無縫　半紙＝松風

（習い方は26ページ）

かな半紙　専門部（五段～準初段＝昇段課題）

左の『関戸本古今集』より「つきのお裳し」から「徒きやとる覧」までの六行を、半紙を縦に使用して臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。



（原寸）

つきのお裳しろ可利介る夜／暁方尓よみ介る／きよ者らのふ可や婦
夏夜盤ま堂よひな可らあ介ぬ／流を雲のいつこ尓徒きやとる／覧

（古今和歌集 巻第三　夏歌166）

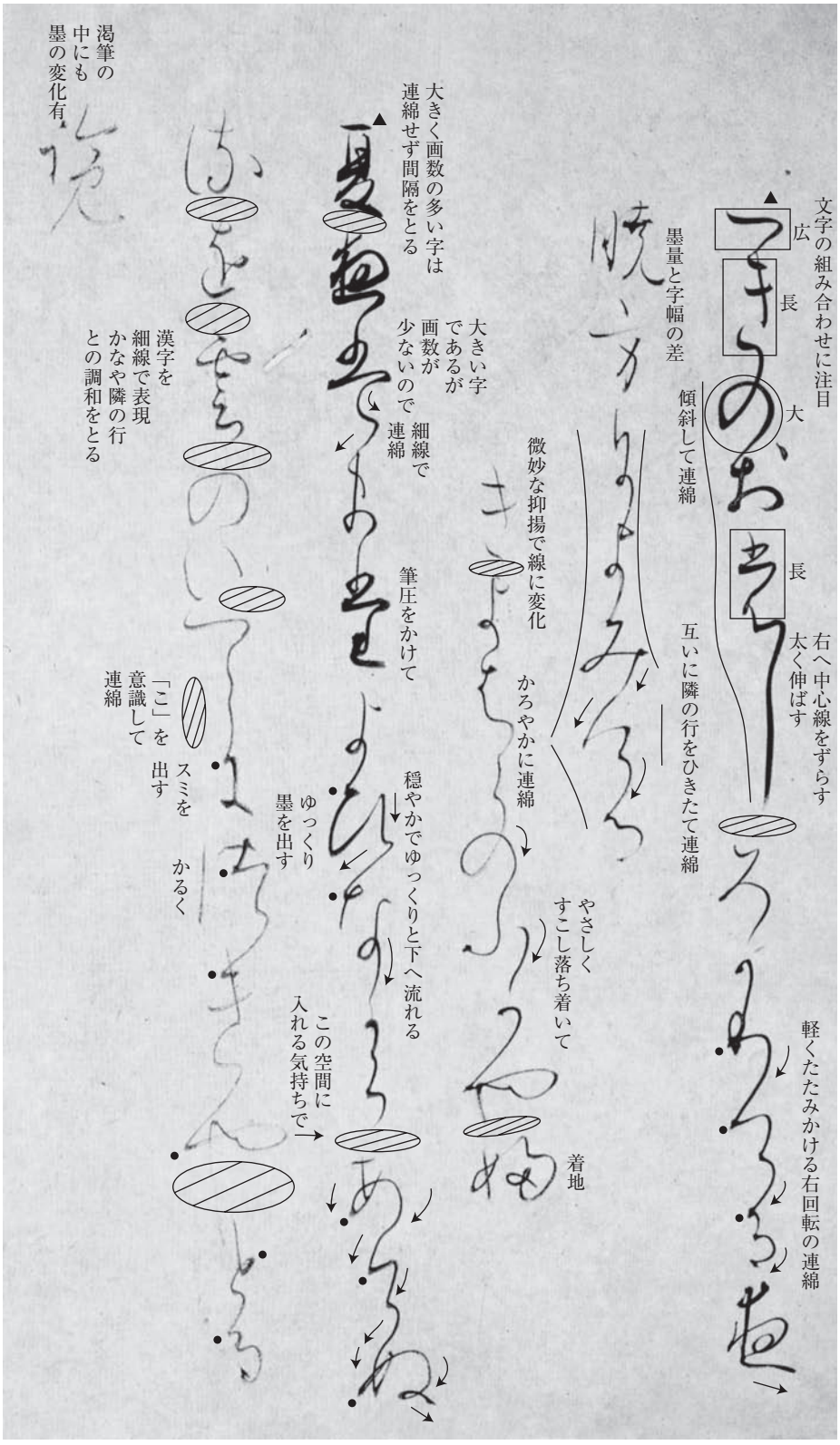
〈読み〉

月のおもしろかりける夜
暁方によみける
清原深養父
夏夜はまだ宵ながら明けぬ
るを雲のいづこに月やどる
らん

〈大意〉

今夜はまだ宵の口だと思っていたら、そのまま空が明るくなってしまったが、これでは月が西に沈む暇があるまい。進退窮まった月は、どの雲に宿を借りているのだろうか。

課題解説（かな半紙五段～準初段）



▲墨継ぎの印です。
筆の⅔位迄墨を含ませ反故紙等で余分な墨を拭き取りキリッとした線をめざして下さい。
●主な転折部につけました。
筆の面を返す仰俯法で丸い鋒先が多面的に使用され墨をしぼり出します。
しっかりと紙にくいこんだ細線です。細線にも太細・遅速・抑揚の変化があります。
謹直にスッキリした縦線、ゆったりした横線に注目して下さい。

〈解　説〉

臨書を楽しんでいますか。課題から凄いなと感心したり美しいなと思う箇所を見つけたりできましたか。昔から富士山を題材に多くの芸術家が沢山の傑作を生んでいます。かの山が常に新しい感動を目覚めさせるからでしょう。古筆と対話してあらたな魅力を発見して体得しましょう。「手習いより目習い」と云われます。臨書は自分の眼で観、自分の心で感じ鑑賞して書く事が大切です。そこには個人差が生じます。ここに臨書のおもしろさがあり一生続く学びであります。

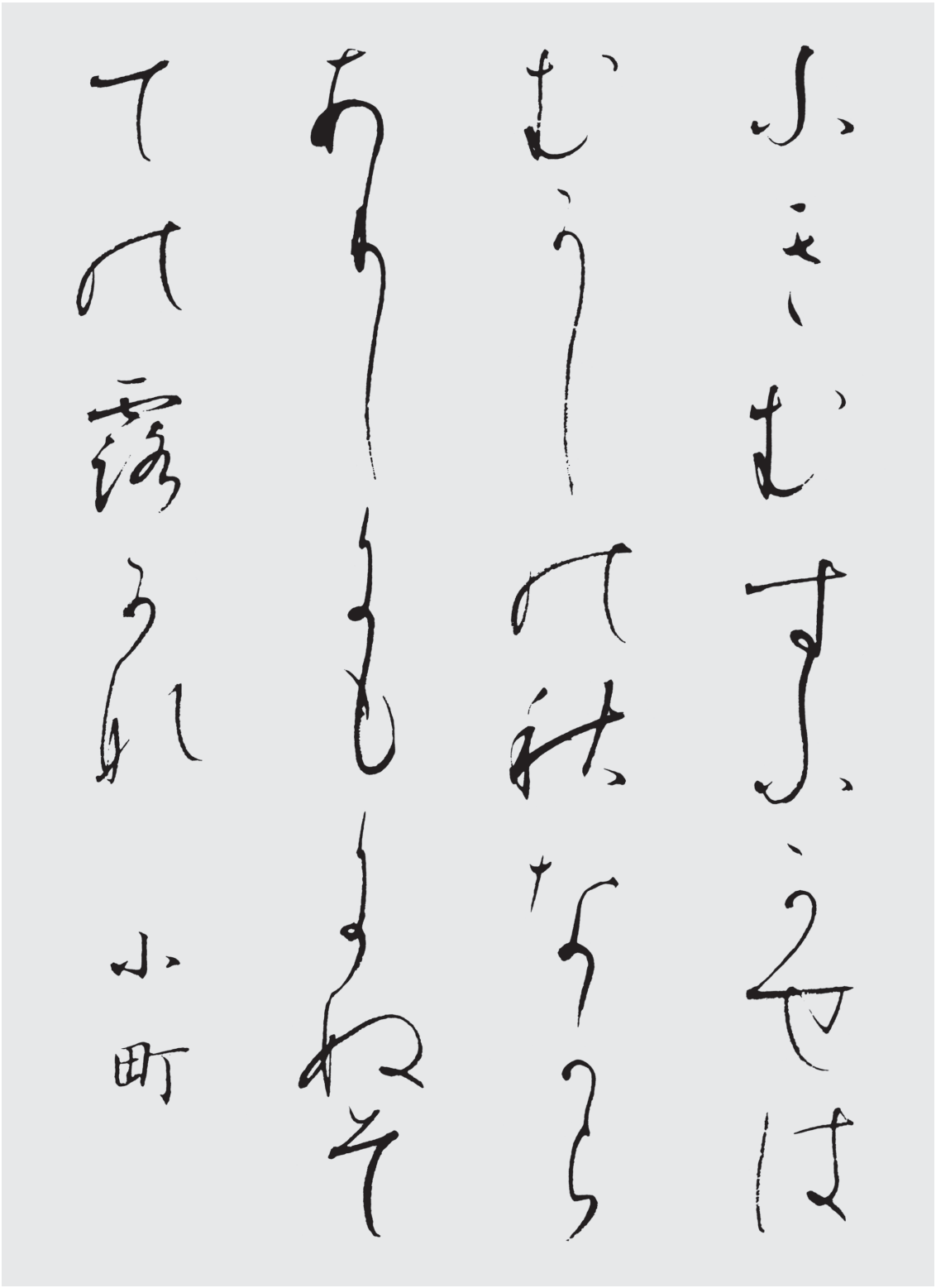
（八尋光華）

【用具・用材】

筆＝かな用小筆
墨＝かな用和墨
紙＝かな用雁皮

かな半紙（1級＝昇段課題、2級～5級＝月例課題）

左の図版の「ふきむすふ」から「そて能露可那」までを半紙を縦に使用して体裁よく書きなさい。



ふきむすふ可せは／む可し能秋な可ら／あ利し尓も尓ぬそ／て能露可那

小町

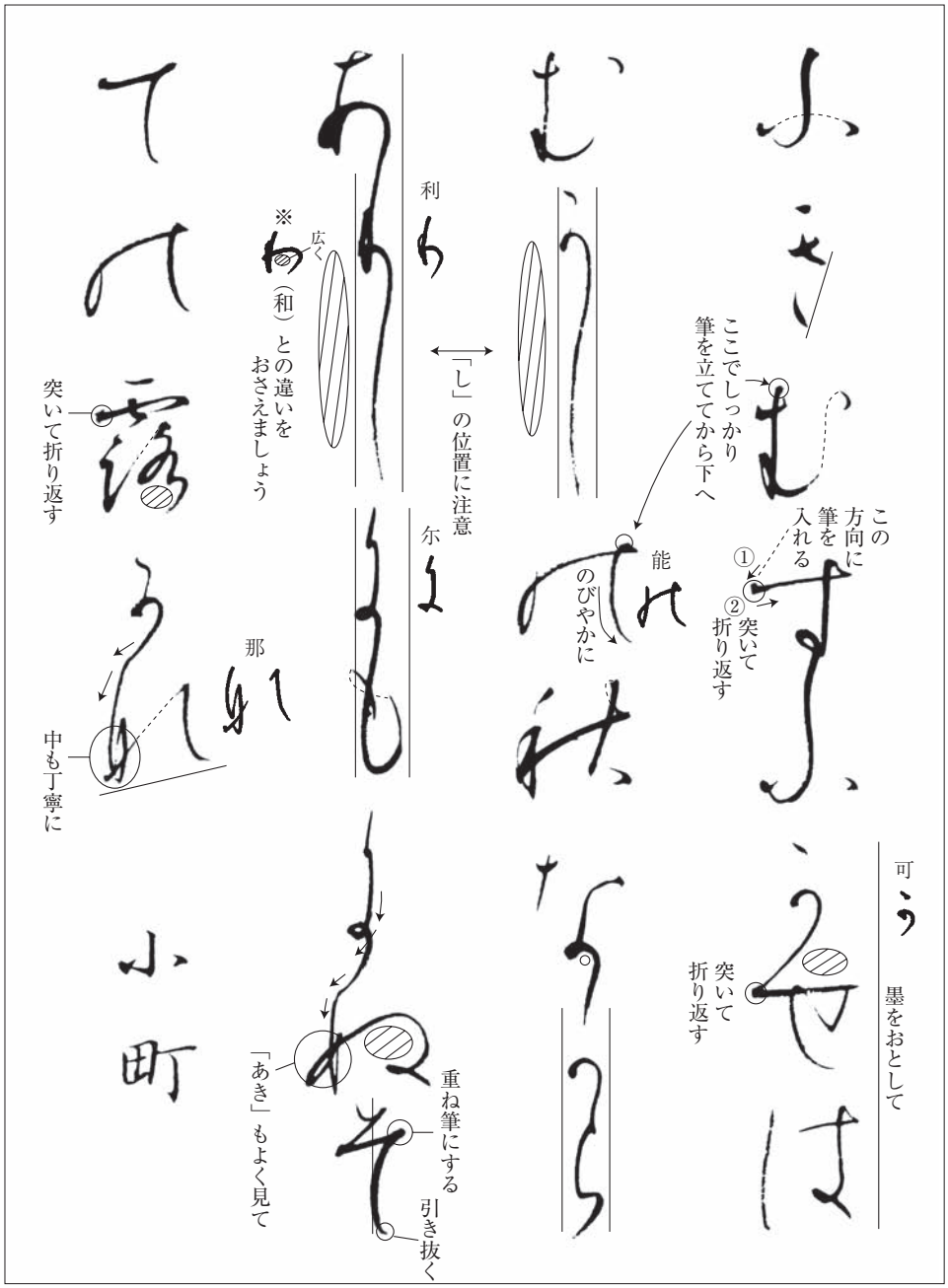
〈出典〉
梅雪かな帖（上）　安東聖空

〈読み〉
吹き結ぶ風は
昔の秋ながら
ありしにも似ぬ
袖の露かな　小町

〈大意〉
吹いて露を結ぶ風は昔と変わらないが、私の袖の露（涙）は昔と変わってしまった。

（新古今和歌集　巻第三　秋歌上　312　小野小町）

課題解説（かな半紙1級〜5級）



〈解　説〉

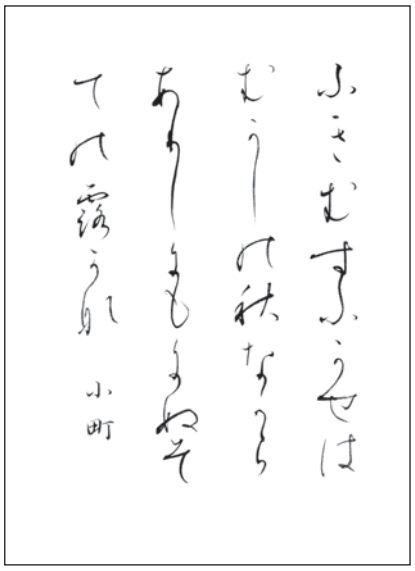
今月も和歌一首を四行書きに臨書します。

字の大小、長短、強弱、重軽等さまざまなものが混じり合いながら調和を保っていることがわかります。多様なものが組み合わさることで美しく生きづいています。変化と統一をぜひ表現して下さい。

書き込んで、すっきりとした澄んだ線にして下さい。

（甲谷景子）

〈参考臨書〉



（甲谷景子臨）

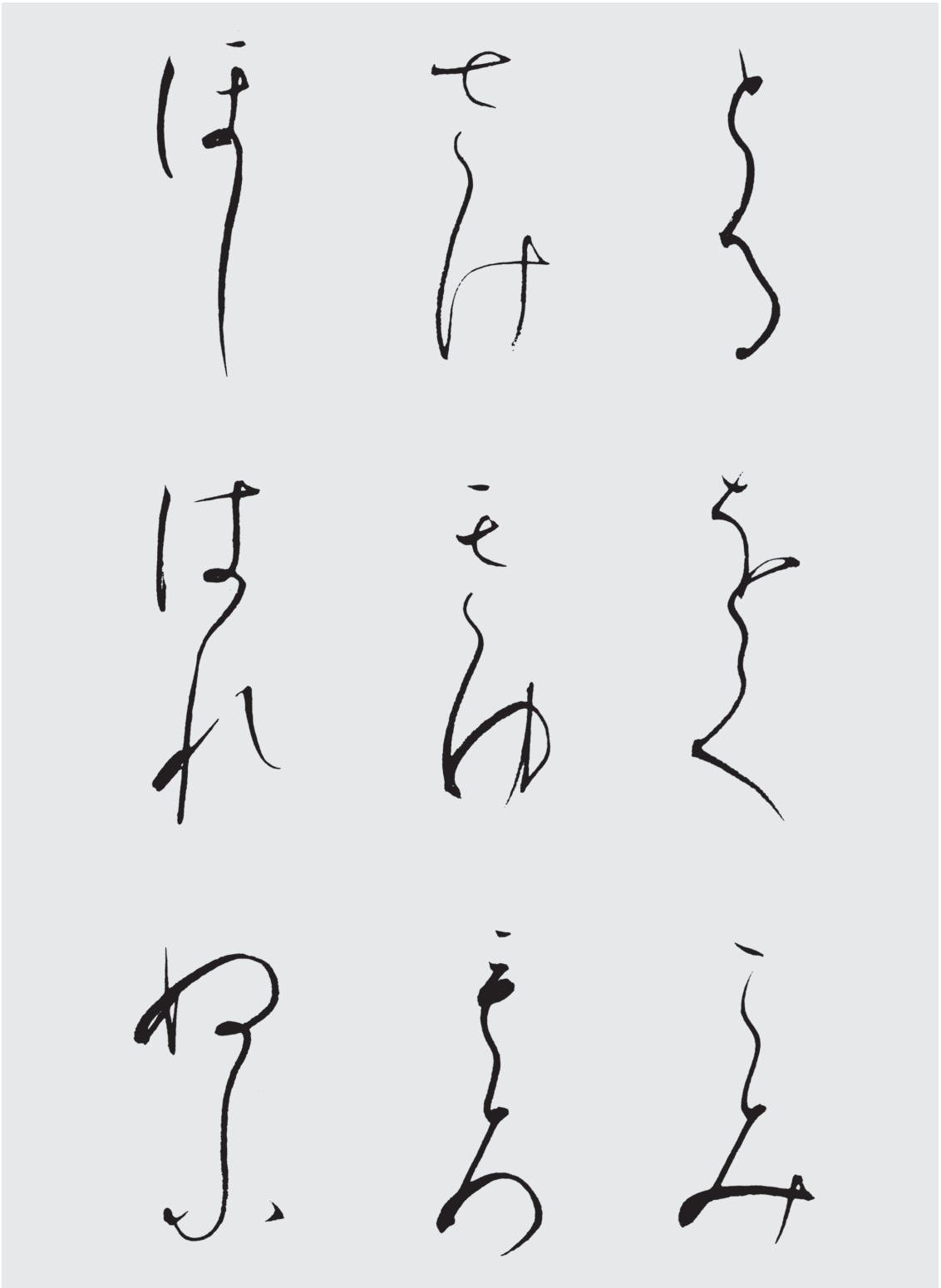
ポイント

①形をよく見ることも大切ですが、線の厚みの変化を見逃さないで下さい。線の厚みの変化で、かなの優美さが生まれます。

②「む」「ふ」「し」「可」「尓」「能」など何度も出てきますが、場面によって表情が異なっています。忠実に再現して下さい。

【用具・用材】

筆＝かな用小筆
墨＝かな用和墨
紙＝かな用雁皮



とる　を久（く）　こみ　さけ　きゆ　毛（も）ろ　ほし　はれ　ぬふ

〈出典〉
梅雪かな帖（上）　安東聖空

〈解説〉
今月から連綿を学びます。文字と文字とを続けて書くことを「連綿」、そのつなぐ線を「連綿線」と言います。

連綿には、連綿線を用いた「形連」と、連綿線はなく、上下の文字の筆脈を通して書く「意連」とがあります。ここでは形連の練習ですが、上下の文字の位置関係に注意して連綿して下さい。

これらが複雑に組み合わさることで、かなの流動美が生まれます。　（川島史子）

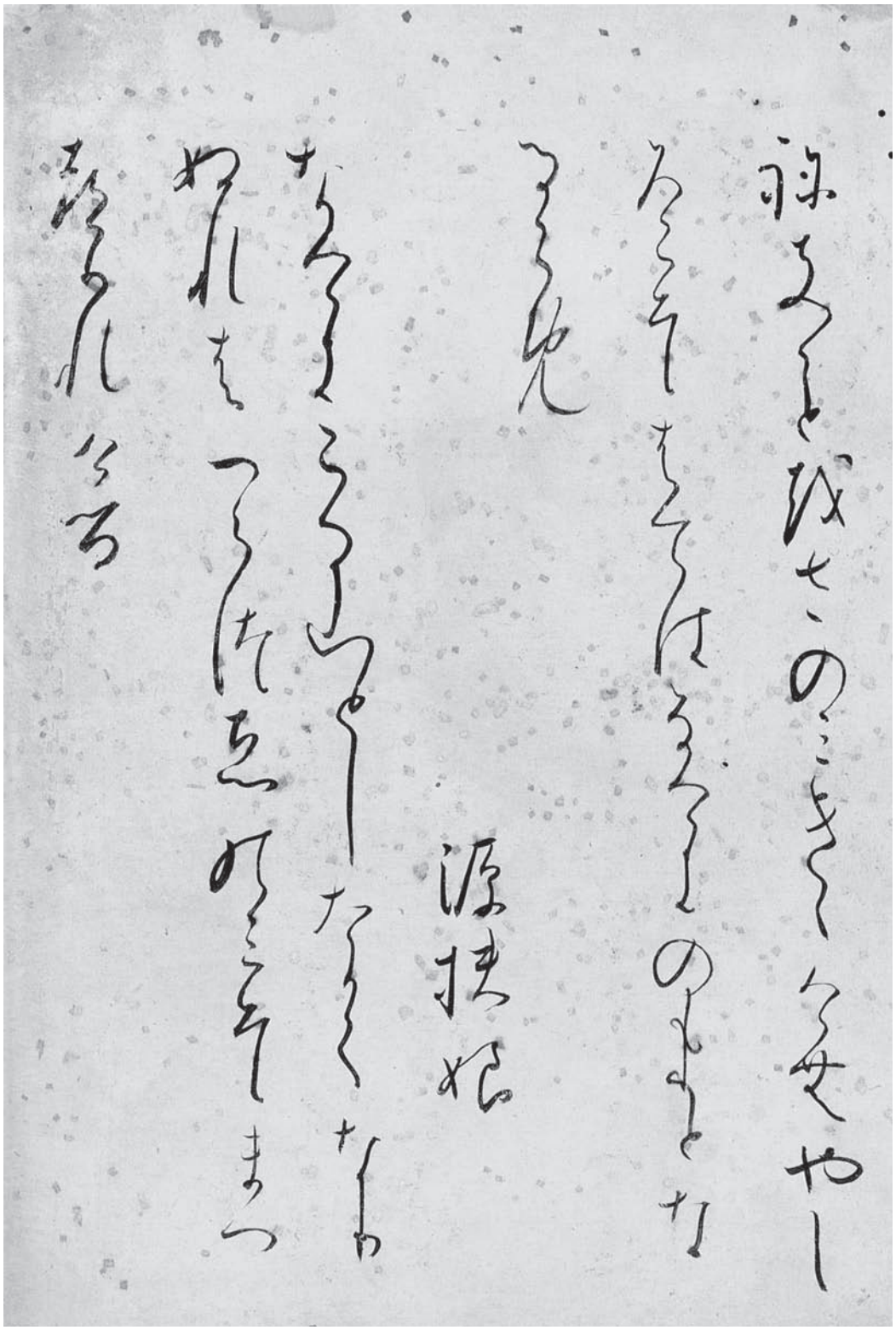
【用具・用材】
筆＝かな細字用筆
墨＝かな用和墨
紙＝かな用半紙

（習い方は26ページ）

かな半紙　専門部（会友～準会友＝月例課題、八段～準六段＝昇格・昇段課題）

左の『元永本古今和歌集』より一行目「祢支こと越」から「都可れ介留」までの七行を半紙を縦にして臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。



（原寸）

（古今和歌集 巻第十九　雑躰 1055・1056）

祢支こと越さの三き、介無やし
ろこそ者ては奈介支のも利とな
るら免　　源扶（弼）娘

な介支こる山とした可久な利
ぬれ者つら徒ゑ能三そまつ
都可れ介留

〈読み〉

○ねぎごとをさのみ聞きけむ
社こそはては歎きの森とな
るらめ　　源扶（弼）娘

○なげきこる山とし高くなりぬれ
ば頬杖のみぞまづつかれける

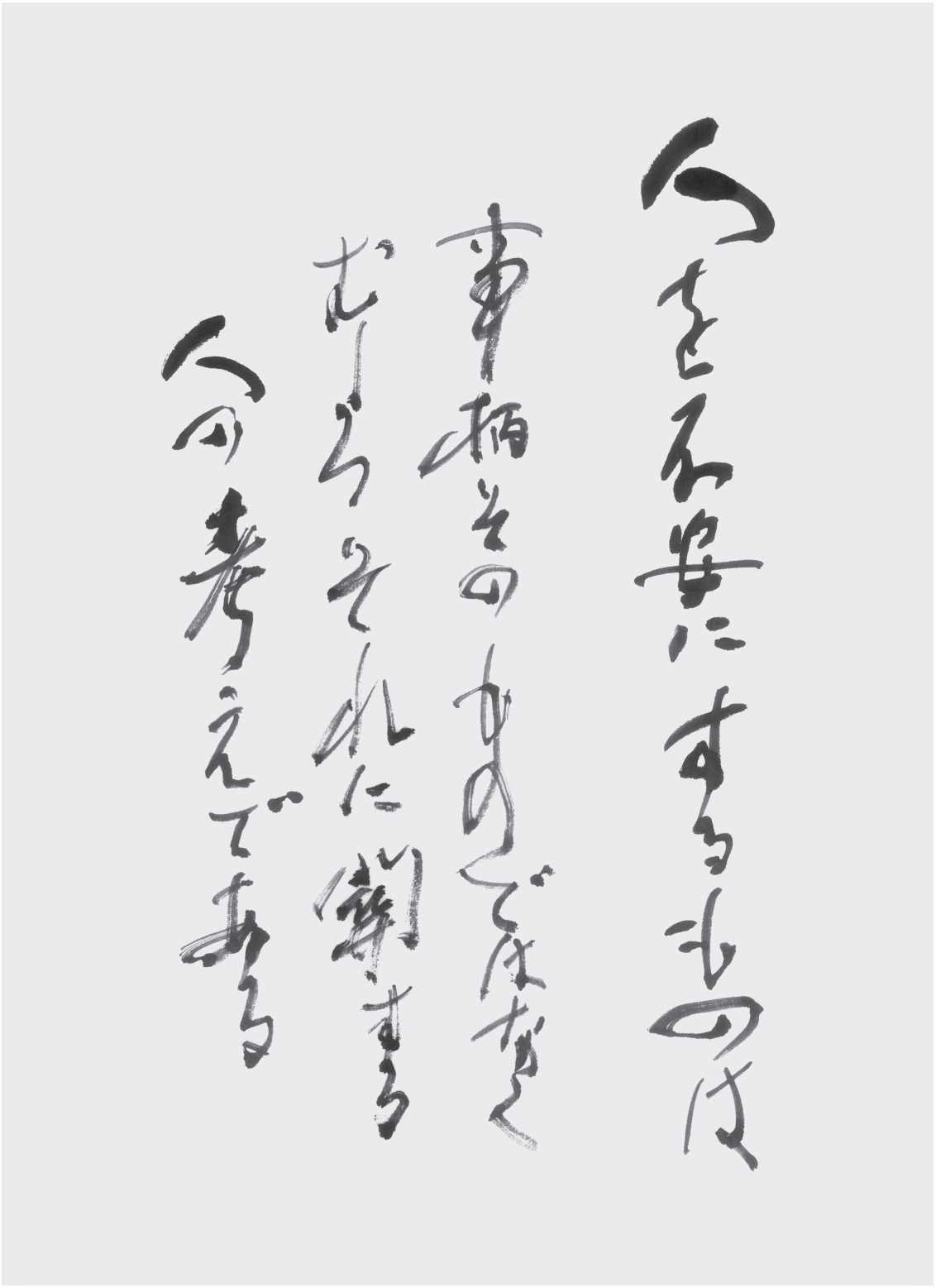
〈大意〉

○お参りにきた人の願いをそん
なにたくさん聞き届けてくだ
さる神様なら、おしまいには
その人たちの嘆きが木になっ
てりっぱな森ができるでしょ
う。

○私のため息が凝り固まって、
木をこる山のように高くなっ
たので、山登りの杖ならぬ頬
杖が真っ先につかれてくる。

新和様半紙　専門部（五段～準初段＝昇段課題）

参考手本　※半紙を縦にして使用



永井香樹書

人を不安にするものは　事柄そのものではなく　むしろそれに關する人の考えである

（習い方は26ページ）

〈作者〉
カール・ヒルティ
（一八三三～一九〇九）
ことばの饗宴「幸福論」

○三十六字の長い文言故、主部一行を標題のように表記し、其れに続けて、三行をひとまとめにして書きました。

○主部の一行目を少し大きく書きました。

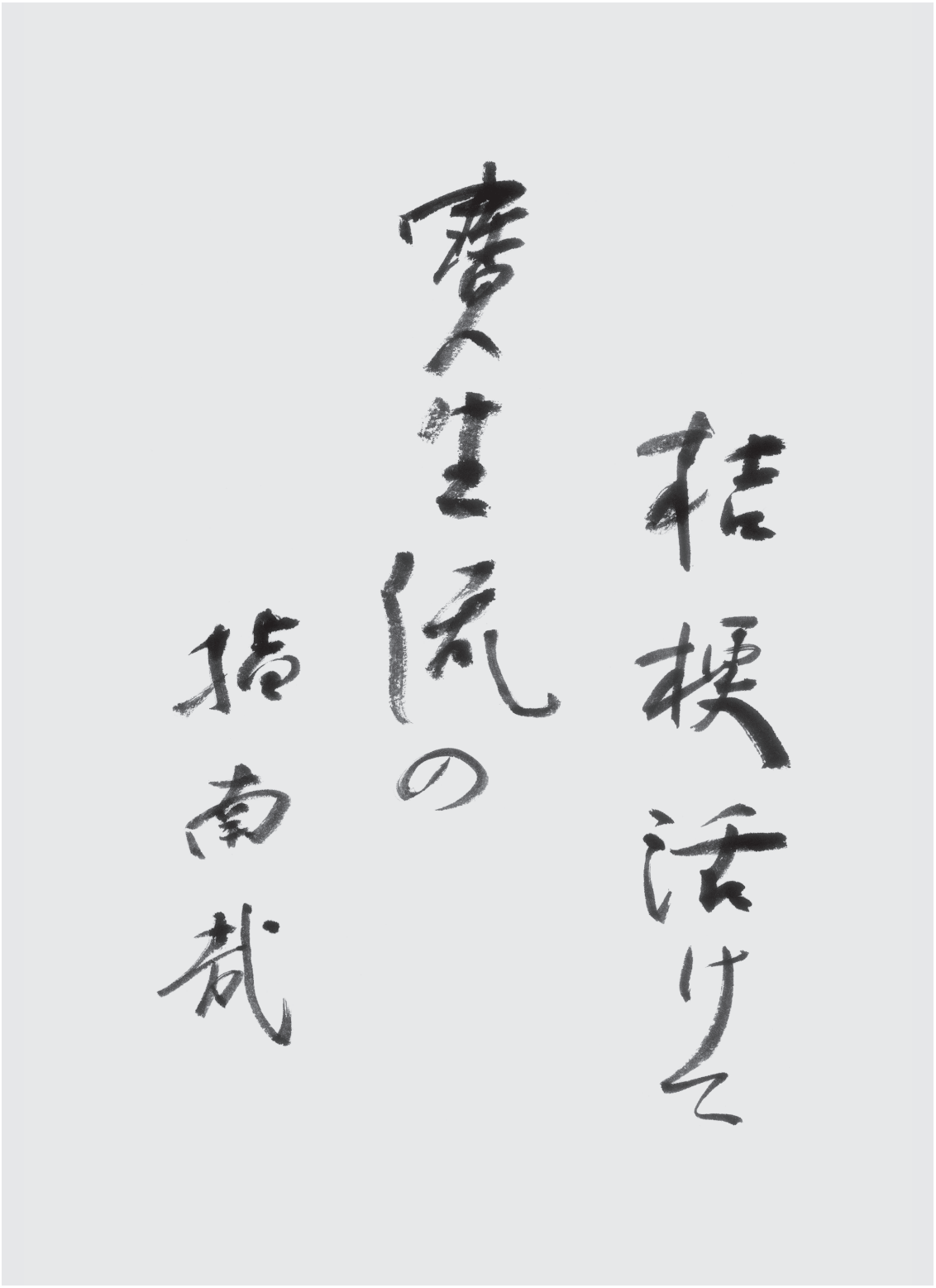
○述部の三行は、一行目に較べて小振りに、行の長さも短くして、行間も少し狭くしています。

○紙面に載せるように真・行・草の行の体でかきましょう。

【用具・用材】
筆＝小筆（中筆も可）
墨＝墨は少量を淡墨で漢字用とは別に磨ります。
紙＝手漉漢字半紙

新和様半紙（1級＝昇段課題、2級～10級＝月例課題）

参考手本　※半紙を縦にして使用



石橋鯉城書

桔梗活けて寶生流の指南哉

〈作者〉夏目漱石（一八六七～一九一六）

〈大意〉
稽古場に、凛とした桔梗の花を活けた。まもなく宝生流の師匠がお見えになり、出稽古が始まろうとしている。

※漱石は明治40年ごろに、高浜虚子の紹介により、宝生流に入門し、能に没頭していたようである。稽古の方法は、師匠の宝生新が漱石宅に通う出稽古の形であった。

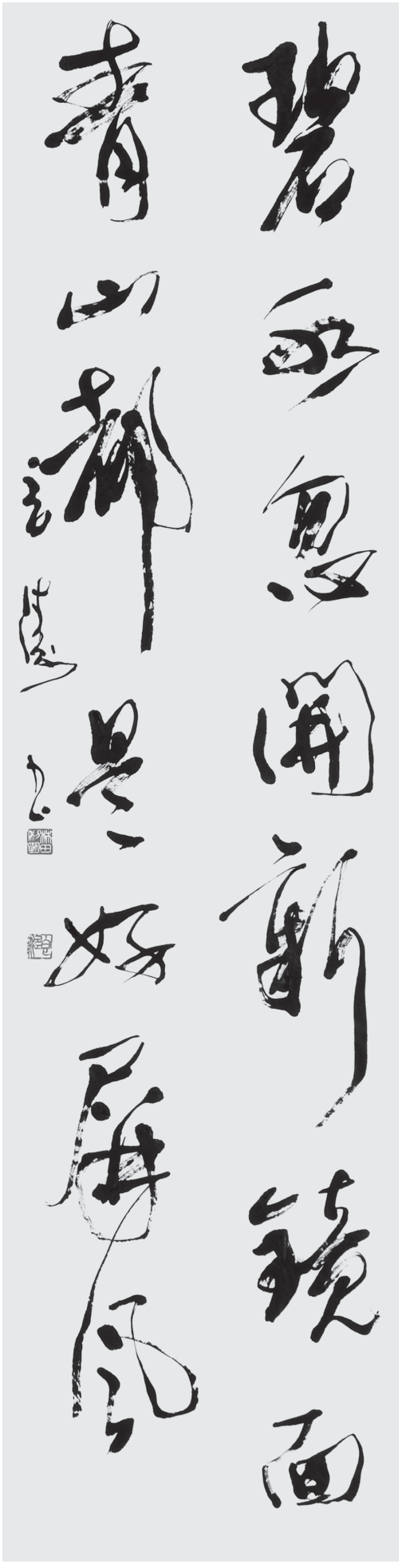
〈解説〉
ご覧の如く、字数が十二字と少く、その中で漢字九字で平仮名は三字と極端に平仮名が少い俳句である。それを半紙上に如何に見映えよく書き上げるか、仲々難しい課題だ。
章法を考えるに当っては、三行で仕上げ、文字群の第一群に一行目の「桔梗活けて」を、第二群には、二行目の「寶生流の」と三行目の「指南哉」を書いてみた。行頭、行末にも留意して、二行目を高くし、一行目を三行目の中間の高さで始めている。偏り過ぎず一応落着いた配置となっているように思う。

〈字造りについて〉
〝桔梗〟は共に木偏で、同じ姿で書くと目立ちすぎるので、旁と共に大小逆にしている。〝活けて〟は〈〉の中に入るように「活」を大きく書いている。〝寶生流〟は筆圧をかけて、此処で行意を表わし、筆の腹を使って重厚さを表現、「の」は添えるように軽く、「指」「南」「哉」は置き石を敷くが如く位置せしめている。

【用具・用材】
筆＝中国製兼毫筆中筆（鐵劍）
墨＝顕微無間
紙＝毛辺（モウヘン）（中国製）

（習い方は26ページ）

漢字条幅 専門部（五段～準初段＝昇段課題） 参考手本



林田香濤書

（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

碧水忽開新鏡面　青山都是好屏風

〈読み〉碧水忽ち開く新鏡面、青山都て是れ好屏風。

〈大意〉碧水はみがき立ての鏡のように眼前にひらけ、青々とした山々はさながら屏風を引きまわしたよう。

〈作者〉伝　兪樾（一八二一～一九〇七）中国清代末期の学者・文人・書家。字は「蔭甫」、号は「曲園」・「春在堂」。

（解説は27ページ）

漢字条幅（1級＝昇段課題、2級～10級＝月例課題） 参考手本

小久保嶺石書

（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

誰種龜陰田

〈読み〉誰か種うる亀陰の田　〈作者〉李白（七〇一～七六二）盛唐の詩人。『東魯の二稚子に寄す』より。

〈大意〉誰が亀陰の田に植え付けをするのか。（私は家を東魯に置いて旅に出てきてしまったが）

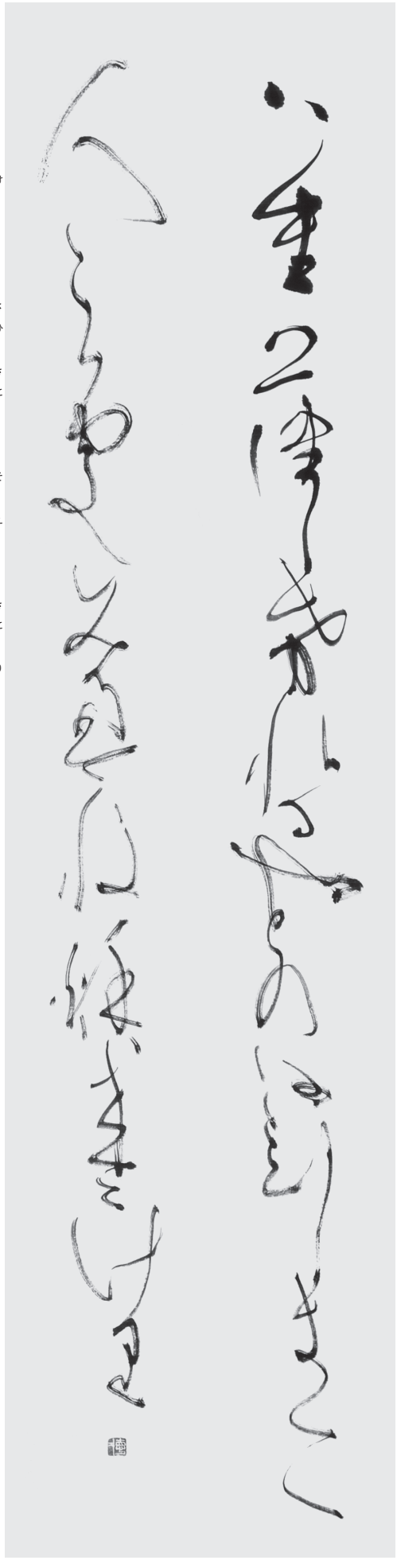
※龜陰　亀山の北。亀山は山東省新泰県の南西にあり、済寧とは近い。ここでは広い意味に魯の全体を示す。

（解説は27ページ）

かな条幅 専門部（五段～準初段＝昇段課題）

参考手本　※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙 かな用画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）



中村清徳書

八重葎し希れるやとの沙飛し支二　人こ處み盈ね秋は来二け里

〈読み〉八重葎しげれる宿のさびしきに　人こそ見えね秋は来にけり　恵慶法師　〈出典〉拾遺和歌集 秋 140（百人一首47）

〈大意〉幾重にもつる草（雑草）の生い茂っている荒れ寂れた宿は寂しく、人は誰も訪ねてこないが、秋だけは訪れるようだ。恵慶法師（えぎょう）は、平安時代中期の歌人、僧。

（解説は27ページ）

かな条幅（1級＝昇段課題、2級～10級＝月例課題）

参考手本　※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

（用紙 かな用画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

内堀信嶺書

日の左すや杉間二美ゆる可良春瓜

〈読み〉日のさすや杉間に見ゆるからす瓜　〈出典〉市原たよ女（一七七六～一八六五）

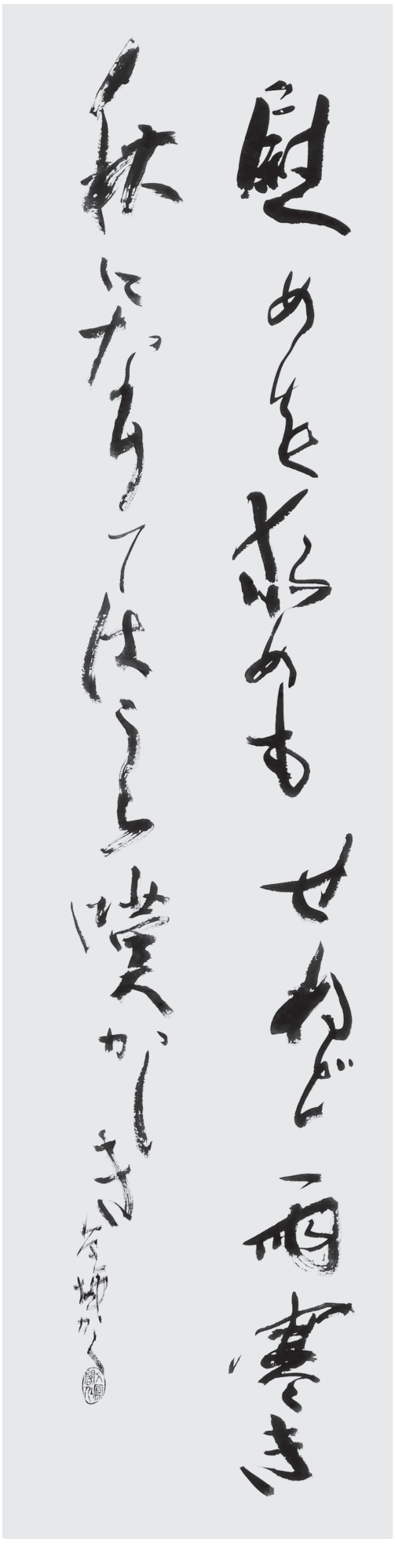
〈大意〉陽の射す山道をゆっくり辿って行くと、暗闇と思えた杉の木の間で、真赤なからす瓜が、日の光に照り映えている。

（解説は27ページ）

新和様条幅　専門部（五段～準初段＝昇段課題）

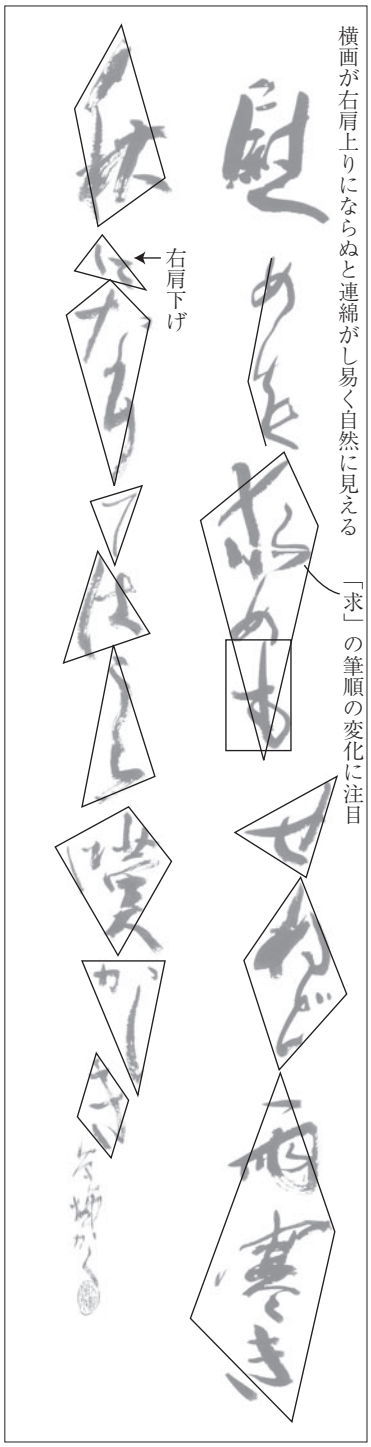
参考手本　石橋鯉城書

※新和様条幅は新和様半紙の有段者対象。条幅初出品の場合は、準初段からの出品となります。



慰めを求めもせねど雨寒き秋になりてはうら嘆かしき　〈作者〉岡麓（おかふもと）（一八七七～一九五一）

〈大意〉私は慰めてほしいと求めもしないが、雨の降る寒い秋になると、何とはなしに寂しく嘆わしくなる。



筆順が変化して縦画を先に書く
草書は革命的書法と言えよう

（用紙　画仙紙半折・たて136㎝×よこ35㎝）

縦書きの流れの表現を掴みたい。時代劇に見るように奉書紙や巻紙を手に持って書く体勢で半紙上に草稿を書いてみよう。縦書きの特徴が表現できる筈だ。

①下書きの時は半紙を下敷きと一緒にもって書いてみたい。**短冊、色紙**を書く時は手に持って書くに限る。

②十七帖の臨書中、父・犀水が横に立ち「慰め」の省略法（崩し方）を説明して「 」と教え、「 」と「 」が如何に省略されているかを見よとその観察法を示して呉れた。崩しの覚え方の参考にして欲しい。

【用具・用材】

筆＝中鋒羊毫（中国製）
墨＝文鳳閣墨
紙＝加工雅仙紙

実用書（随意課題）

感謝（かんしゃ）　御神前（ごしんぜん）

御香料（ごこうりょう）　忌明志（きめいし）

お偲料（しのびりょう）　粗供養（そくよう）

佐藤友理著「美しい手紙」（三多軒発行）より

参考の小筆
・白楽
・玉梓
・選毫圓健

○出品用紙は、左側に示した清書用紙でも、これをコピーして書いても結構です。洋紙に書くことをここでは原則とします。

切りとって提出してください（コピーも可）

〈 清 書 用 紙 〉

教室名

氏　名

月　別
出品券
を貼る

・月別出品券（73ページ）とバーコード出品券（段級欄に「実用」と記入）を左下に貼付してください。

今月の競書課題

専門部　会友～準六段

今月の出品期間9月6日(月)～9月13日(月)必着

漢字半紙

左の語句を、**半紙を縦使用、自運縦書き。**（書体自由）

浮雲吐明月

浮雲吐明月　流影玉階陰
千里雖共照　安知夜々心
〈出典〉『鳴鶴作品草稿集Ⅱ　宋 欧陽脩』
〈読み〉浮雲明月を吐く。
〈大意〉浮き雲の中から明月がとび出してきたかのような情景である。

かな半紙

『元永本古今和歌集』臨書

課題は11ページに掲載しています。

新和様半紙

左の短歌を、**半紙を縦使用、自運縦書き。**
（漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重）

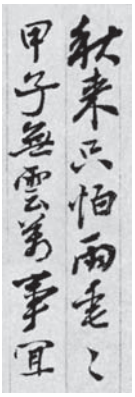
秋立つは水にかも似る洗はれて思ひことごと新しくなる

〈大意〉暑い夏を乗り切り、爽やかな秋に入る。秋という綺麗な水に洗われて人の心も新たな出発になる。
〈作者〉石川啄木（一八八六～一九一二）　〈出典〉新編啄木歌集（岩波文庫）

漢字条幅

左の語句を、**画仙紙半折**（136cm×35cm）**を縦使用、自運縦書き。**（書体自由）

秋来只怕雨垂々
甲子無雲万事宜



〈読み〉秋来りて只だ怕る雨の垂々たるを。甲子は雲を無くして万事宜し。
〈大意〉実りの秋がやって来て只恐れることは雨が降ることだ。甲子の年には雲も無く全て良かったのだが。
〈出典〉『鳴鶴作品草稿集Ⅱ　范成大 田園四時雑興』

かな条幅

左の和歌を、**画仙紙半折**（136cm×35cm）**を縦使用、自運縦書き。**（変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由）

吹く風の色こそ見えね高砂の尾の上の松に秋は来にけり

〈大意〉吹く風の色は秋とは見えないが、高砂の峰の松に、秋は来たことだ。
〈出典〉新古今和歌集　巻第四　秋歌 上 290　藤原秀能

新和様条幅

左の短歌を、**画仙紙半折**（136cm×35cm）**を縦使用、自運縦書き。**
（漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重）

この山は落葉松つづきから松に白かんばまじり霧小雨あり

〈大意〉この山の風景は落葉松が何処までも長くつづき、徐々に白樺が交り、静かに霧小雨に煙っている。
〈作者〉北原白秋（一八八五～一九四二）　〈出典〉北原白秋歌集（岩波文庫）

自運＝与えられた課題語句を課題とし、自運作品として筆墨紙、墨の磨り工合を工夫し、書作品として造型すること。それ故、先生に手本を書いてもらうことは避けるべきである。作品制作に当っては、古典からの集字などを試みて始めるのもよい。
参考図書としては、現代字体字典（講談社）、五體字類（西東書房）、大字典（講談社）、古典かな字鑑（書藝文化新社）、広辞苑（岩波書店）、古語辞典（旺文社）などを見たい。

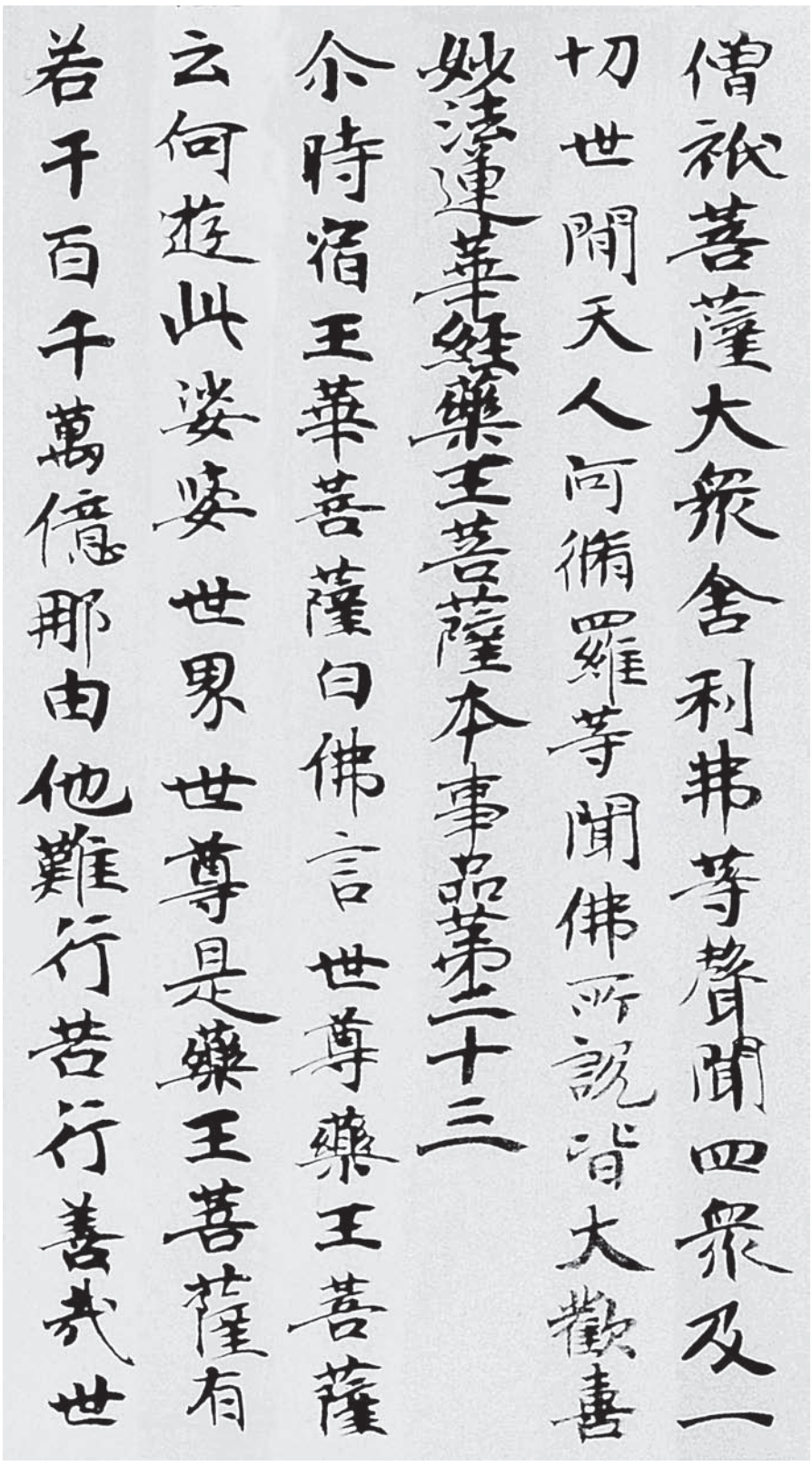
10月号課題予告

漢字半紙	流影玉階陰　（鳴鶴作品草稿集　欧陽脩）
かな半紙	夜をさむみ衣かりがね鳴くなへに萩の下葉もうつろひにけり　（古今集）
新和様半紙	こころよき疲れなるかな　息もつかず仕事をしたる後のこの疲れ　（石川啄木）
漢字条幅	穫稲畢工随曬穀　直須晴到人倉時　（范成大　田園四時雑興）
かな条幅	みづぐきの岡の葛葉も色づきて今朝うらがなし秋のはつ風　（新古今和歌集）
新和様条幅	雨の間は急き鳴く蛙しきりなり早や夕づきし障子にひびけり　（北原白秋）

※課題及び課題の文字は変更することもあります。

僧祇菩薩大衆～調御丈夫天の百九十三字を清書して出品。

國寶　法隆寺伝来細字法華經（擴大率二倍）



（無邊阿）
僧祇。菩薩大衆。舍利弗等。聲聞四衆。及一
切世間。天人阿脩羅等。聞佛所說。皆大歡喜。
妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三
爾時宿王華菩薩。白佛言。世尊藥王菩薩。
云何遊此。娑婆世界。世尊。是藥王菩薩。有
若干百千萬億。那由他。難行苦行。善哉世

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

（無辺の阿）僧祇の菩薩の大衆と舍利弗等の声聞の四衆と及び一
切世間の天・人・阿修羅等とは、仏の所説を聞きたてまつりて、皆大いに歓喜せり。
妙法蓮華経薬王菩薩本事品第二十三
その時、宿王華菩薩は仏に白して言わく「世尊よ、薬王菩薩は
云何にして、娑婆世界に遊ぶや。世尊よ、この薬王菩薩には、
若干の百千万億那由他の難行苦行あらん。善い哉、世

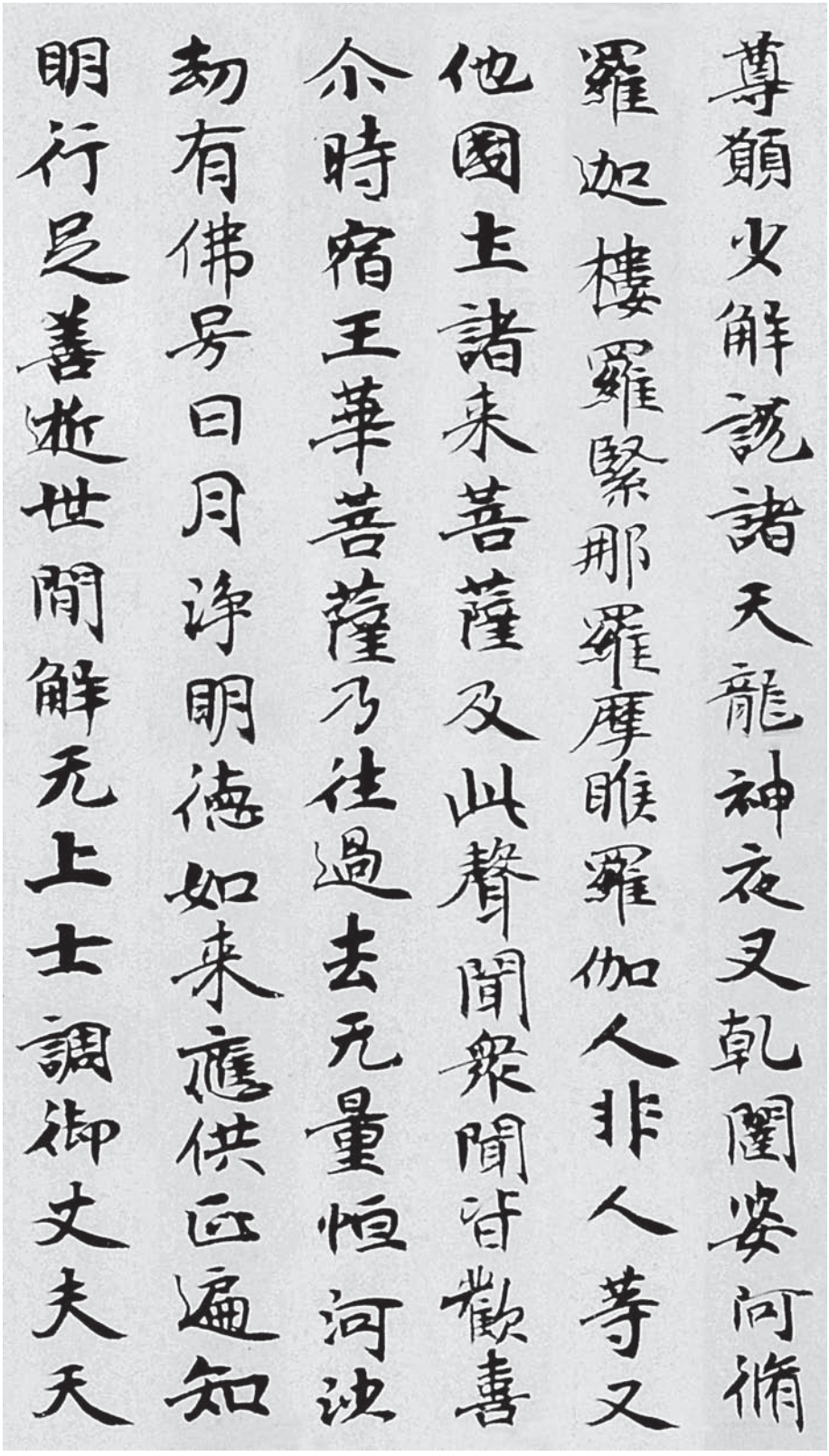
6	5	4	3	2	1
聞	等	利	衆	薩	僧
(1-12)	(1-10)	(1-8)	(1-6)	(1-4)	(1-1)
四	聲	弗	舍	大	祇
(1-13)	(1-11)	(1-9)	(1-7)	(1-5)	(1-2)

〈解説〉石橋鯉城

下の「法華経」（見開き 12 行）か、次頁「般若心経」一巻のどちらかを選んで清書し出品してください。

尊。願少解說。諸天。龍神。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。又他國土。諸來菩薩。及此聲聞衆。聞皆歡喜。爾時**佛告**(次)。宿王華菩薩。乃往過去。无量恒河沙劫。有佛。号日月淨明德如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。无上士。調御丈夫。天（人師。）

尊よ、願わくは少しく解説したまえ。諸の天・竜神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等と、又他の国土より諸の来たれる菩薩及びこの声聞衆とは、聞かば皆歓喜したてまつらん」と。その時、**仏は**(次)宿王華菩薩に**告げたもう**(次)「乃往過去、無量の恒河沙の劫に、仏有せり。日月浄明徳如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天（人師）・



○法隆寺細字法華經

この寫經（法隆寺細字法華經）の淨書を習わせて頂いていると、当時の僧侶の格別なる書寫業への鍛錬が窺える。眠ることも、食べることも忘れて只管に書かれているようだ。日本の書道は中国よりこうした素晴らしい御寫経と智永の千字文を頂き、それを基として文字も覚え、用具も真似て開発し、遂に國字の創造にも及んだ。ただただ漢字文化の傳統に感謝あるのみである。

全文音読して和漢混淆文の響きの美しさに触れましょう。
図版中文字で、判然としていないところは、経典の「釈文」中の同字の書き方に倣って書きます。

清書の氏名の後に「謹寫」または「敬寫」の二字を書き添えます。

不二篆刻研究室

▼**規定**…左の語句を刻しなさい。（朱白自由・大きさは4センチ角以内）

蒲深柳密

〈**読み**〉蒲深柳密（がまふかくやなぎみつなり）

〈**大意**〉蒲は伸びて長くなり、柳は密になっている

▼**随意**…好きな語句を刻しなさい。（朱白自由・大きさは4センチ角以内）

○作品は「半紙横½」を縦長にして体裁よく押印し、印影を提出。

○巻末の出品要項をよく読んでご出品ください。

一字書

▼**規定**…左の語を創作しなさい。（書体自由）

〈**読み**〉［音］カン（呉）（漢）

［訓］かんがみる　かがみ

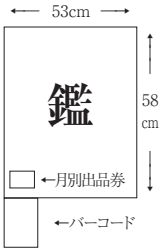
〈**意味**〉①かがみ。金属製のすがたみ。手本。模範。いましめ。

［補説］「鑑」は異体字。

〈おすすめの用具・用材〉

萬象 50枚（夾宣）

作品の左下に教室名・氏名・会員番号・段級を鉛筆で記入のこと。



▼**随意**…左の語を創作しなさい。（書体自由）

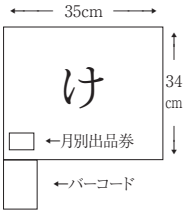
仮名の成り立ち「計」を考えて創作すること。

〈おすすめの用具・用材〉

一字書 100枚（夾宣）

特選一字書 100枚（夾宣）

作品の左下に教室名・氏名・会員番号を鉛筆で記入のこと。



○バーコードは、段級欄に「一字書規定○段（級）」または「一字書随意」と書いて貼付してください。（**規定の方は段級を忘れずに**）

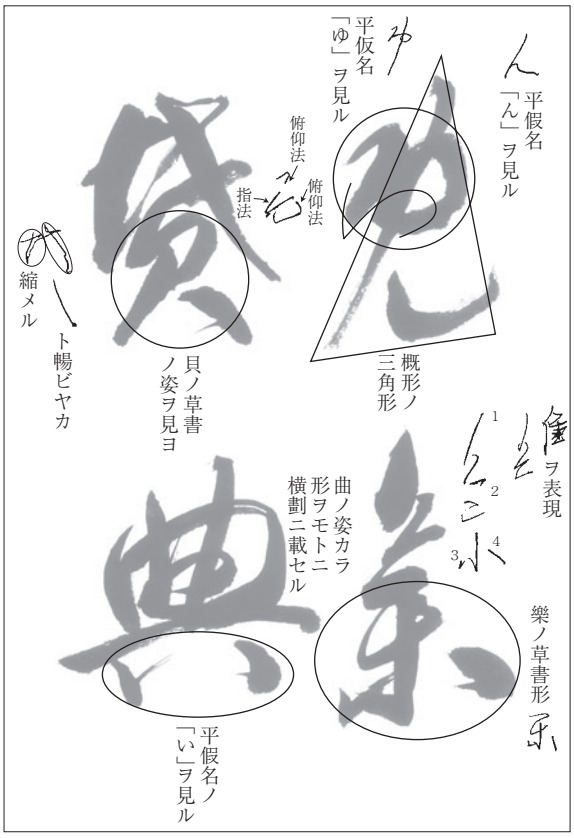
○落款は印のみか一字に雅印ぐらいで。

○巻末の「競書出品要項」をよく読んでご出品ください。

課題解説

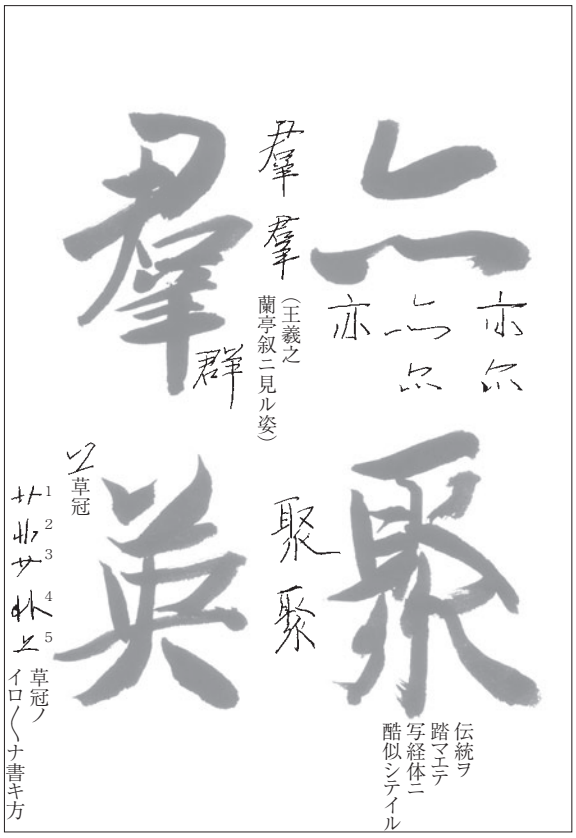
今月の出品期間
9月6日（月）～9月13日（月）必着

漢字半紙　五段～準初段（真草千字文）



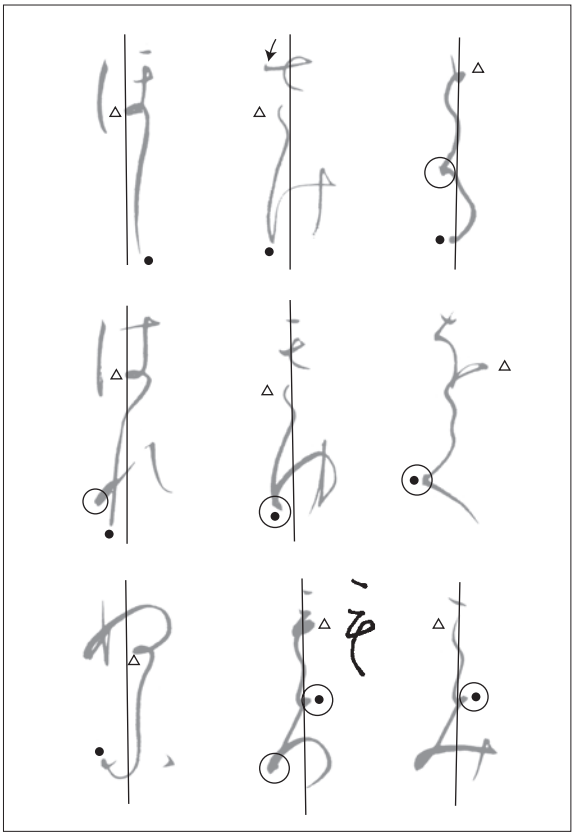
（石橋鯉城）

漢字半紙　1級～5級（真草千字文）



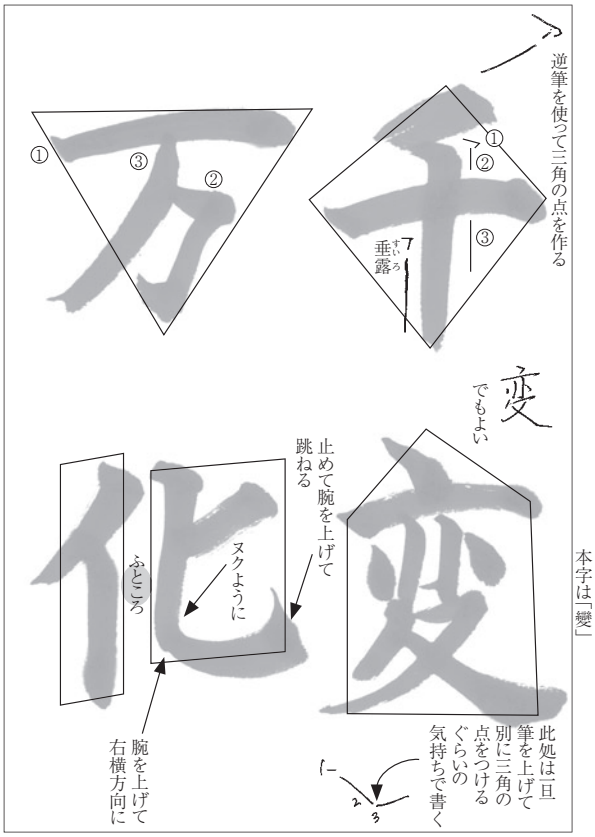
（石橋鯉城）

かな半紙　6級～10級



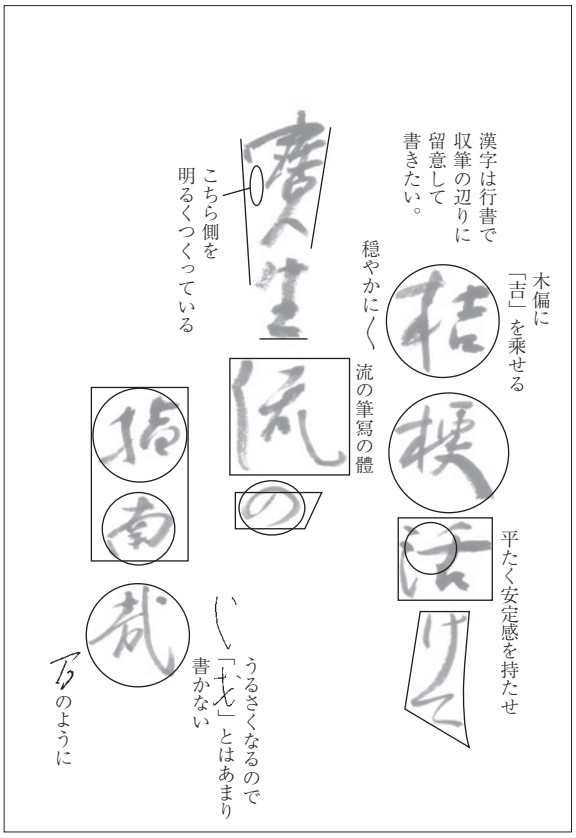
（川島史子解説）

漢字半紙　6級～10級



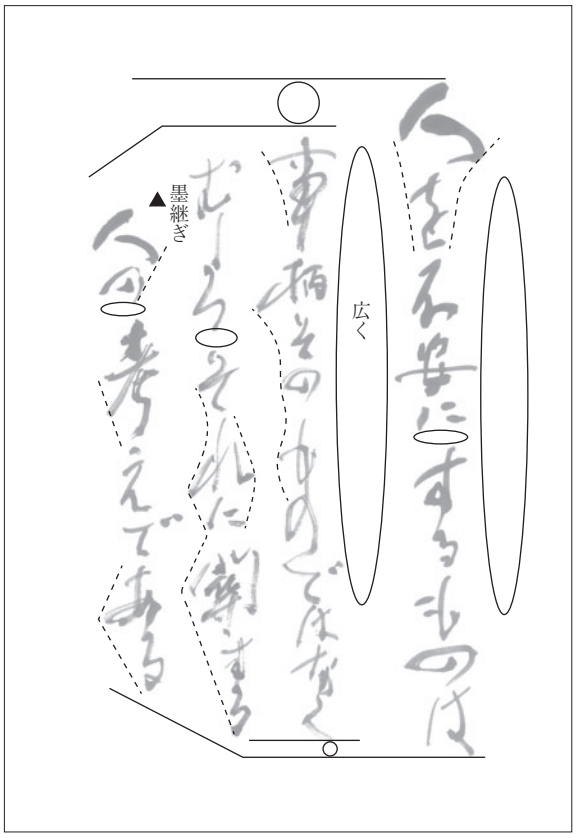
（石橋鯉城）

新和様半紙　1級～10級



（石橋鯉城）

新和様半紙　五段～準初段



（永井香樹）

漢字条幅　五段〜準初段

（林田香濤）

曲線の運筆を主体に、和らいだ表現を目指した。しなやかな細線を多く用いて、明るい空気を出せるようにしたい。

○細線はスッキリと深く切り込んでいるだろうか。

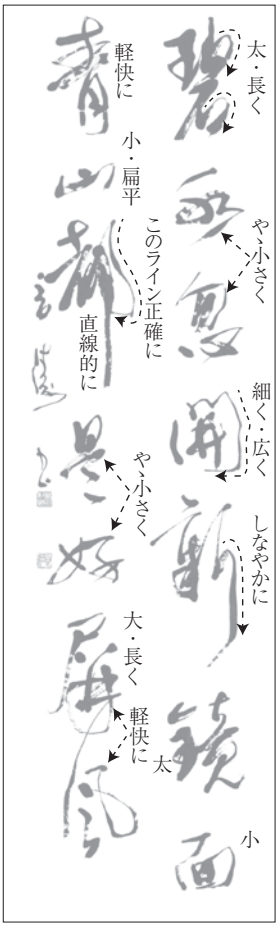
○筆の弾力を利かせたしなやかな表現になっているだろうか。

○和らいだリズム感は一貫しているだろうか。

〈用具・用材〉

筆＝和筆・羊毫長鋒　墨＝和墨・油煙墨

紙＝中国画仙紙



漢字条幅　1級〜10級

（小久保嶺石）

○五文字作品としての体裁を考え、構成の上で文字の字形・墨色・バランスなどに留意する。

○東晋王羲之や黄庭堅、犀水千字文などを参考にする。

誰…「言偏」を行書で強めに大きくして、あえて三文字の旁をやや下げた字形に造型。

種…「のぎ偏」を細く長めにして、旁をやや太めに、横画の方向の変化に留意する。

亀…草書を用いながら大きく表現したい。およその字形を覚えてリズミカルに。

作品のポイントと考える。

陰…「こざとへん」を細くし、旁はやや強めにして太細の変化を試みることが大切。

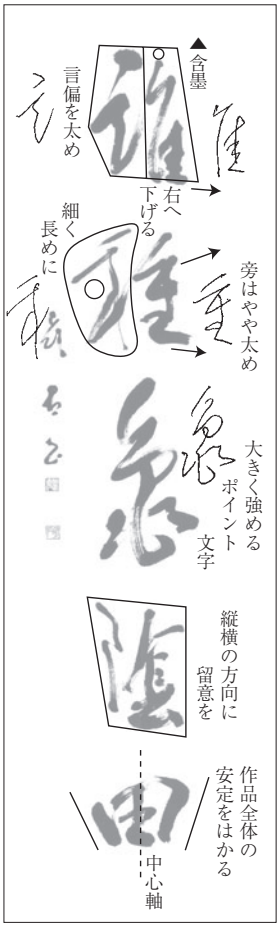
田…中心軸を意識して、縦画と横画の安定や文字間隔などにも気をつける。

○落款の位置と落款印に留意しながら、作品としてバランスを考えて仕上げたい。

〈用具・用材〉

筆＝和筆・羊毫長鋒　墨＝和墨・油煙墨

紙＝中国画仙紙



かな条幅　五段〜準初段

（中村清徳）

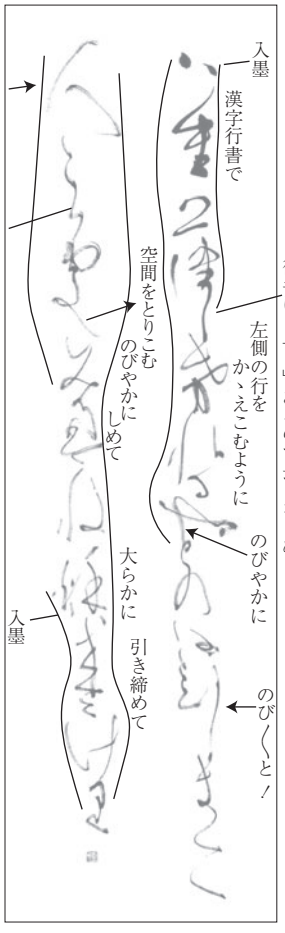
書き出し「八重葎」行書で墨量過多にならぬよう気をつけて、以下あまりむずかしい変体がなは使用せず、単々と書き進みます。「しげる」縦の流れを意識して「やど」は漢字を入れてもよいと思います。「さびし」の「し」字源「飛」を使用。次に続く「し」の延びやかさを意識しました。

二行目上部の渇筆部をのびやかに大らかに運筆して下さい。結句で入墨して作品をまとめましょう。

〈用具・用材〉

筆＝かな用条幅筆　墨＝和墨

紙＝和画箋



かな条幅　1級〜10級

（内堀信嶺）

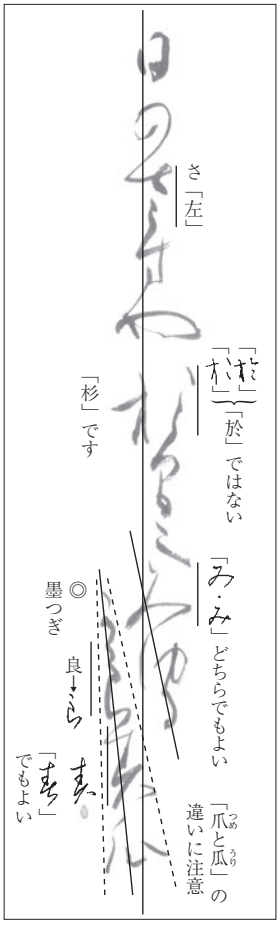
○用紙の中心に対する行の配置・構成に注意したい。

○下部の行の中心移動と「さ・杉・み・ら・す・瓜」の正字と変体がな・崩しの類似する文字の違いに留意したい。

〈用具・用材〉

筆＝かな条幅用筆　墨＝和墨

紙＝かな用画仙紙



昭和二十八年二月二十日第三種郵便物認可　毎月一回一日発行　定価八〇〇円
令和三年八月二十五日印刷　令和三年九月一日発行　第六十九巻第九号　通巻第八一九号

不二　一般版

書道創造の原点　漢字造型と漢字かな交じり書

第33回 色紙展

新和様・書作家協会会員の皆様に「小なりといえども大宇宙」の気概でご揮毫いただきました。神田書学院を会場に、会員の皆様の力作が一堂に会する見応えのある展覧会です。是非お誘い合わせのうえお運びください。

会　期　8月27日［金］－8月29日［日］
午前10時～午後6時（最終日は午後4時まで）

会　場　神田書学院（書道学会ビル3・4F）
東京都千代田区西神田2-2-3　電話：03-3234-3956

【主　催】　公益財団法人 日本書道教育学会
新和様・漢字造型書作家協会

http://www.nihonshodou.or.jp

段　級		会員番号
漢字半紙		
かな半紙		
新和様半紙		
漢字条幅		不二教室
かな条幅		氏　名
新和様条幅		
細　字		
篆　刻		
一字書		

毛筆・ペン・篆刻作品展

第43回 全国公募 千字文大会

会　期　令和3年9月25日［土］－27日［月］

■ **会　場**　日本書道藝術専門学校（第1会場）、東洋文化不二研修所（第2会場）
（東洋文化不二研修所）〒414-0044 静岡県伊東市川奈 1191 TEL 0557-45-3254

■ **時　間**　午前10時～午後4時30分（最終日は午後3時まで）

【主催】学校法人 日本書道藝術専門学校　公益財団法人 日本書道教育学会

入場無料

〈日本書道藝術専門学校　千字文大会事務局〉
〒414-0051 静岡県伊東市吉田1022　TEL（0557）45-4194　FAX（0557）45-3256
http://www.nihonshodou.ac.jp/